

五代目蛤屋儀兵衛傳

久保田万太郎

文藝春秋新社

火事息子 著者久保田万太郎くぼた まんたろう

昭和三十三年九月二十日印刷

昭和三十三年九月三十日發行

發行者車谷弘 發行所東京都

中央區銀座西八ノ四株式會社

文藝春秋新社 印刷者山田一

雄 印刷所本文精興社 色刷

大日本印刷 製本所大完堂

定價二百九十圓

目次

火事息子

五頁

をんな運

四拾九頁

さても、その後……

七拾八頁

茶わんざけ

壹百拾五頁

あの目あの顔

壹百四拾頁

あとがき

壹百七拾壹頁

さしふ・木村莊八

附……………コブラ 木村伊兵衛

表紙……………表・淺草寺境内に於ける著書
張・淺草仲見世のはづき山
……………久保田万太郎

口繪……………一勇齋國芳畫

(全書繪・所有)

火
事
息
子

火事息子

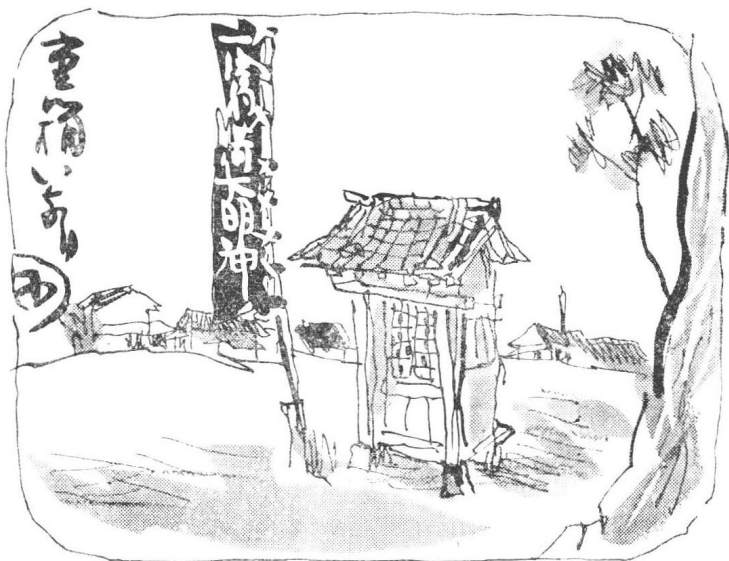
一

おれのところの先祖ッてものは、相州厚木あつぎの在の造り酒屋ざかやの二男坊で、名まへを儀平といつたといふんだが、それが、いつのまにか、儀兵衛になつた。……儀兵衛のはうが、一應、もつともらしく聞えるからだらうナ。……それは、まア、どっちでもいいゝとして、とにかく、この人が、手のつけられない道樂もので、みごと家うちを勘當され、しやうことなしに、あてもなく江戸に來たものだ。……からだが大きく、それだけにまた力のあつたところから、輕子かるこになつた。……いまでいへば、小運送だ。……よくは分らないが、おそらく、二十四か五のときだらうナ。……いまをさる百何十年まへ、文化とか、文政とかいつた時分のことだ……

が、輕子ぢやア、いくら身を粉にしたところで、稼ぎは知れてる。さきの見込だつてない。そこで、千住にあつた鮎屋新兵衛といふ川魚問屋に住みこんだ。安全な主人もちになつたッてわけだ。……で、ちゃんと、無事に何年かつとめ上げて、やがて暖簾をわけてもらひ、大橋の近くに、メソッコうなぎを焼いてうる屋臺店をだした。……のが、鮎儀こと鮎屋儀兵衛といふもののこの世に生れたそも／＼で、その後、また、何年か相立ち申したとき、淺草の山谷に、野放しどうやうになつてた地面をみつ、それを安く買つて、いまでいふ食堂だ、入れごみの、氣の張らない、手がる一式の、鯉こくとうなぎめしの店をはじめたとおぼしめせ、だ。

これが、當つた。

ところが、こゝにをかしいのは、その地面うちに、小さな稻荷のお宮があつた。伊勢屋、稻荷に、犬の糞といはれた位のものだから、そこにそんなお宮があつたつて、べつになにも不思議ぢやアなかつたんだが、その稻荷に、どういふいはれがあつたのか『重箱稻荷』といふ、世にもめづらしい名まへが附いてゐた。……それによつて、その界限では、その一トくるわを、一トくちに『重箱地面』といつてゐたが、それが、やがて、その店にまで及んで、いつとはなしに、その食堂、何んと、だれも『鮎儀』といふものはなくなり、手ッとり早く、『重箱』『重



箱……さういつたゞけでとほるやうになつたぢやアないか。……いへば、それだけ、界限での評判の店になつたわけで、じっさい、また、びっくりするほど繁昌したらしいんだ。……がしかし、その後、永い年月のあひだに、それがだん／＼、店のほんとの名まへのやうになつてしまつたといふことは、だ。……嘘からでたまことつてもない。……ときには、そんなヒウキンなこともあるものなんだナ、世の中には……

初代のその儀兵衛さんには子供がなかつた。そこで、しかるべき人の世話で、よそからあとつぎをもらつた。……これが、紀州さまの御家老の落し胤だにだといふことだつたが、あとになつて、じつは御家老ではなく、紀州さま直々ちきぐの落し胤だといふことがわかつた。……その證據には、鮎屋儀兵衛め、後に、紀州家御用を仰せつけられ、葵の紋のついた提灯だの、門鑑だのをもらつて、公然、おッけ晴れて、屋敷へ出入できるやうになつた。……といふことは、一度なれど、儀兵衛さん、すっかり金ができたもんで、かねての望みの上方見物にでかけた。そのとき、大阪で、いゝ庭石をみつけ、燈籠だの、つくばつたの、大沓おはくぬぎだの、欲ばつて、しこたま買ひこんだ。……さういふものをあつめるのが好きだつたらしいんだね。……が、さて、買ひは買つたが、どうやつて、それを、江戸まで運ぶか？……といふ本戸につきあたつた。……

が、このとき、辨慶、すこしも騒がず、すまして「紀州家御用」をふりかざし、船に積んで、難なく品川までもつて來たといふ……

ところが、だ、さうした、ヒヨンな、高貴なお生れといふだけで、それ以外には、その二代目について、これぞといふはなしが、何んにも残つてゐないんだ。それだけでみても、あんまりパツとした人ぢやアなかつたらしいんだが、そのくせ、こまつたことに、初代のセツかく丹精した身上に、大分、どうも、穴をあけたらしい。……といふのは、わるいことはできないもので、そのあとを繼いだ三代目が、これはまた、大へんしつかりした人で、傾きかけた「鮎儀」の身上を建直したといふ言ひつたへが、べつのはうから、あきらかにされてゐるんだ。……

……「傾きかけた」といふ以上、傾けさした犯人のあることにまちがひはないからナ……

この三代目は、味噌で有名な下總の流山……といふと、おれは、すぐ、「天保六花撰」の金子市之丞をおもひだすんだが、その、内藤市郎兵衛といふ名主さまの何番目かの息子で、二代目とおなじく、やつぱり養子にもらはれて來たんだが、そんなひだりまへになつてゐる店とは知らずに來たらしく、それだけに、しなくつてもいゝ苦勞をいろいろしたらしい。一説には「重箱」といふ、客のはうで勝手につけた名まへを、「鮎儀」の代りに、はッきり、店のほん

との看板にしたのは、この人のさりやくだつたといふんだが、だとすると、それだけでも、どうしたら、一人でもよけいに客がよべるか、店の人氣を、いやが上にも引きたいせることができるか？……始終、しんけんに、商賣と取ッ組んで人だつたといふことがわかる。……勿論、そのときは、もう以前のやうな「食堂」ではなく、一けんの、ちゃんとした、三百坪あまりの廣い庭だけでも、江戸市の中のどこへだしてもみづともなくないだけの貫祿をもつた料理屋になつてゐた。……といつたつて、うなぎやはどこまでも鰻やだつたんだが、ナマズのすッぽん煮だなんてものをはじめ、それがまた、客にうけて、とんだ名物みたやうなものになつたりしてサ。……それだけに、三代目、隨分、人に知れない無理もしたらうし、辛いおもひもしたらうと思ふんだ。時勢は、江戸から東京にうつるしサ……これは、それから何十年かの後の、五代目として、はからずも、おんなしやうな目に逢つたおれだから分るんだと思ふんだが……

止さう……。愚痴に入るのは、まだ早い……

で、三代目には……儀兵衛を繼ぐまでは、菊造といふ名まへだつたその人には、おたかといふ娘がひとりあつた。その娘に、徳次郎といふ自分の甥をめ合せ、やがて、それを、四代目にした。……のが、つまり、後におれの親父になつたわけの人なんだが、この人ッてものが、大

した氣樂人^{きらくじん}でね。……とにかく、商賣そっちのけに、鰻の雌雄を發見したりして、水産講習所の囑託になつたッて位のものなんだから……

二

うなぎッて奴は、秋、大雨がふると、川の上から下へくだつて来る。それをクダリといふんだが、そのなかに、＼どうもコレが卵らしい＼と思はれるものをハラにもつたやつのあるのに目をつけ、

——もし、さうとすれア、こいつが雌といふことになるんでは？……

と、親父、かねてから御懇意にねがつてゐた水産講習所の、神谷さんといふ先生のところに、一ッ不審^{ふしん}、申しにでかけたものだ。

と

——たしかに卵だ。……よく氣がついた。……早速、研究しよう。

といふことになつて、神谷先生、ほんきで乗りだした。……つまり、うなぎは、ハラに卵を

もつたまんま海へ入つて行き、おどろくほど遠ッ走りをしたあげく、そこで卵を産む。……そこまでは分つてゐたんだが、では、さて、どれが卵を産む雌かといふことになる、その時分には、まだ、せんさくがついてゐなかつた。だから、親父の手柄は、『どうもコレが卵らしい』といふものを、うなぎのハラのなかゝらみつけたゞけのことだつたが、やがてその神谷博士の研究の結果が發表されると、はじめてうなぎの雌雄がわかつた、世界的の發見だと、親父の名まへまでだして、デカ／＼に新聞が書いた。……親父め、すッかり、めんくらッた。……明治三十四五年ごろのことだつた。

さういふ氣樂人ぢやアあつたが、庖丁をもたしたら、しかし、東京のうなぎや仲間に、肩を並べるものがないといはれた位の名人だつた。これは、勿論、若いとき、三代目の菊造さんときびしく仕込まれたからだつたが、そのまへに、もと／＼當人が、自分で仕事の好きだつたことが大きな力だつた。それだけに、仕事となると、まるで人間のかはつたやうに、たゞもう、ムキになつて、下手に話しかけでもしようものなら、それこそ、目のたまのとびでるほど嘔鳴られた。

その親父に、おれは、小學校の高等二年のときから、店を手傳はされた。……高等二年とい

へば、年にして、まだ、十三四だ。……で、手傳ふと、一日について、三錢づつ小づかひをくれた。……といつても、そのうちの一錢は、テンびきで、嫌應なしに貯金させられたんだが、だん／＼でも、それが出世して、三錢が五錢になり、十錢になり、しまひには、一圓になり、二圓になり、三圓になりした。……したがつて、はじめは、いまでいふ公休でも、年季小僧なみに、盆と正月と、年に二度の宿下りしかもらへなかつたが、そのうちに、何んのかの、それが三度になり、五たびになり、毎月になつた。……さうした工合しきが、明治三十六年の春、小學校をでて、明治四十二年の暮、兵隊にとられるまでつゞいたわけだ。

勿論、兵隊は、甲種合格で、入つたのは、市川國府臺の野砲十六レン隊……

そのころ、兵隊にでるとなると、どこの家でも、ばか／＼しい騒ぎやうをしたもので、半月も十日もまへから、『祝入營、何んのなにがし君』と書いたノボリを、十本も、二十本も、その家のまへに押し立てる。……その位だから、いざその日が来るッていふと、前の晩からの飲みつゞけで、ト、いゝかげん、もう、フラ／＼になつた當人を、そのノボリと、ジンタカタッタの樂隊とで、親類、縁者、友子友達が、萬歳、萬歳で、兵隊屋敷におくりこむ。……いくら景氣をつけられたつて、當人にしたら、地獄の門をくぐるんだ、ちツともうれしかアない。……

毎年、それをみせられてるから、おれは、べつに拗ねたわけでもなかつたが、朝、まだ、暗いうち、だれにもいはず、身のまはりのものをもつて、親父の弟分になる人と、店の若いものと、三人だけで家をでた。……それもいゝ、早すぎて、電車もまだ動いてゐなかつたんで、山谷から兩國驛まで、眞つ白に霜の下りてゐなかを、トボ／＼あるいたものだ。……空に、星が、キラ／＼光つてゐた……

ところで、おれッて奴は、これでも、小學校ではいつも一番で、ずつと級長をしてゐた。だから、卒業式には、卒業生總代として、家へ歸れば三錢のねうち……その時分には、もう、五錢になつてゐたかナ？……しかなかつたやつが、小倉こくらの瀧たき綱なづなのハカマをはいて、いッばし高慢なつらをして、答辭を讀んだ。……仰げばたふとし、わが師の恩、さ……

とにかく、それほど、子供の時分には、タチがよかつたんだ。……このタチのよかつたことが、やがて、おれに、モノは何んでも要領だ、立ちまはりかた一つだといふよくない智慧を、いつおぼえさせるともなく覺えさせた。兵隊に入つてからのおれは、とんだ商賣ものの、うなぎのやうに、泥の中にもぐつて、おれッてものゝ生地きぢを決してみせなかつた。……といふことは、早いのはなしが、營内では、酒もタバコものまなかつた。タバコのはうは、はじめッから、